

宋代華嚴宗と宋版『孔目章』の刊行

——湛睿写「孔目章成仏心要後序」の紹介——

櫻井 唯

一 はじめに

唐の武末（在位八四〇〜八四六）が行った会昌廃仏や、唐末から五代にかけておきた戦乱の影響により、中国では一時、多くの仏教典籍が失われた。宋代に入って、散逸した仏典を朝鮮半島や日本に求めて逆輸入し、それらが大藏經として刊行したことが天台宗や華嚴宗における教学復興の原動力となった。宋代における華嚴宗章疏の復還は、高麗の義天（一〇五五〜一一〇二）が入宋して晋水浄源（一〇一一〜一〇八八）に師事し、高麗に伝来していた中国華嚴典籍を浄源に送ったことに端を発する。¹このとき浄源が蒐集した典籍は、華嚴宗の僧侶らによって順次刊行された。そして、紹興五年（一一四五）には、杭州慧因院（慧因教院）に住した義和（？〜一一三八〜一一六五？）の尽力により華嚴宗章疏入藏の勅許が下りたと伝えられる。²

本稿では、鎌倉期から南北朝期の学僧、湛睿（一二七一～一三四六）が書写した「孔目章成仏心要後序」という資料を検討し、この写本に含まれる宋版『華嚴経内章門等雜孔目』（以下、『孔目章』）巻四後序を紹介する。宋版『孔目章』巻四後序は今まで注目されてこなかった資料であるが、宋代華嚴宗の動向を知る上で重要な情報を含むと思われるため、その資料的価値を明らかにしたい。

二 「孔目章成仏心要後序」について

『金沢文庫古書目録』³⁾には、遼（契丹）の道殷（生没年未詳）撰『顕密円通成仏心要』（称名寺聖教八五函四号）とともに、その後序を書写した「顕密円通成仏心要後序」（称名寺聖教八五函五号）の書誌情報に掲載されている。後者は、道殷の門人であった性嘉（生没年未詳）が記した序と、その後、磧砂版刊行時に僧録であった管主人（生没年未詳）が大徳一〇年（一三〇六）に『顕密円通成仏心要集』⁴⁾を入蔵する際にしたためた序からなる。称名寺蔵「顕密円通成仏心要後序」の内容は『大正新脩大蔵経』⁴⁾に収録されているものと同一であるが、称名寺所蔵の写本には、この後序が日本の古写本には無く「新渡宋本」⁵⁾にのみあったことが記されている。そして、本資料に関する先行研究では、この「新渡宋本」が「道眼房」⁶⁾によって請来されたという記述が注目されてきた。すなわち、この「道眼房」は、吉田兼好の『徒然草』第一七九段に登場する「入宋沙門、道眼上人」と同一人物と推測されている。

このように、称名寺聖教八五函五号は磧砂版『顕密円通成仏心要集』の後序を書写した資料として整

理・研究がなされてきたのであるが、実は本資料の中には、唐の智儼（六〇二〜六六八）撰『孔目章』が宋代に刊行された際に附された後序の一部が含まれている。加えて、大阪青山歴史文学博物館が所蔵する称名寺文書の紙背聖教（二紙）、および「孔目章成仏心要後序」と記された表紙（一紙）も、称名寺聖教八五函五号の一部であることが判明した。すなわち、称名寺聖教八五函五号の本来の名称は「孔目章成仏心要後序」であり、湛睿が『孔目章』および『顕密円通成仏心要集』の版本の後序を書写し、手撮本としたものである。

上述のように、「孔目章成仏心要後序」は、湛睿が『孔目章』と『顕密円通成仏心要集』の後序を書写した資料である。前者の『孔目章』は唐代初期に華嚴教学を確立した智儼の著作であり、教理上の重要な問題を章ごとに分け、華嚴五教の観点から論じている。一方、『顕密円通成仏心要集』⁸⁾は、遼（契丹）の覺苑撰『大日経義釈演密鈔』の影響を受けた文献で、顕教を華嚴五教によって分類した上で、密教も円教に相当すると位置づけ顕密の修行論を説く。つまり、両書には華嚴教学に関係するという共通項はあるものの、成立した年代やその背景は異なっている。

何故、湛睿はこの二つの文献の後序を一冊にまとめたのであろうか。その理由は、湛睿が書写した称名寺蔵『孔目章』（称名寺聖教一〇二函四号）および『顕密円通成仏心要集』を参照することで理解できる。すなわち、湛睿は両文献の書写に際して、底本である「和国伝来の古本」を墨で写した後、「宋朝印本」⁹⁾で校訂を行い、字句の異同がある箇所については朱で書き入れを施している。そして、湛睿は両写

本の奥書に、「若し此に本を写さんとする人有らば、則ち先に純ら一本を写し、後に更に点付して、両本を混雑する莫れ。(若有此為写本之人、則先純写一本、後更点付、莫混雑両本矣。)⁽¹⁰⁾」と記している。要するに、湛睿は「和国古本」と「宋本」のテキストの系統の違いを意識し、後人に注意を促しているのである。このことから、「孔目章成仏心要後序」は、系統の異なる「和国古本」に「宋本」の文章が混入しないよう、湛睿が別紙に後序だけを書写しておいたものと推測される。湛睿は、宋版『孔目章』と磧砂版『顕密円通成仏心要集』とを、ともに近年新しく渡ってきた「宋本」と認識し、合わせて整理したのである。

称名寺聖教八五函四号と大阪青山歴史文学博物館所蔵の資料とを整理し、「孔目章成仏心要後序」を本来の姿に復元すると次のようになる。

表紙

① 大阪青山歴史文学博物館蔵「孔目章成仏心要後序」

宋版『孔目章』後序

② 大阪青山歴史文学博物館蔵「孔目章卷一後序」

③ 称名寺聖教八五函五号・第6紙目(孔目章卷一後序)

④ 称名寺聖教八五函五号・第4紙目(孔目章卷四後序)

⑤ 称名寺聖教八五函五号・第5紙目(孔目章卷四後序)

積砂版『顕密円通成仏心要』後序

- ⑥ 称名寺聖教八五函五号・第1紙目（顕密円通成仏心要後序）
- ⑦ 大阪青山歴史文学博物館蔵「顕密円通成仏心要後序」
- ⑧ 称名寺聖教八五函五号・第2紙目（顕密円通成仏心要後序）
- ⑨ 称名寺聖教八五函五号・第3紙目（顕密円通成仏心要後序）

「孔目章成仏心要後序」のうち宋版『孔目章』後序の底本は、当時高山寺に所蔵されていた宋版であったことが称名寺蔵『孔目章』の奥書、および大阪青山歴史文学博物館蔵「孔目章卷一後序」¹¹から分かる。高山寺の宋版については、一九三四～一九三五年に常盤大定氏と大屋徳城氏がそれぞれ調査を行い、『孔目章』卷一および卷二が現存していることが報告され、兩人によつて卷一後序の翻刻が発表されている。¹² それらと比較すると、「孔目章成仏心要後序」の『孔目章』卷一の後序は、湛睿による書き入れと思われる部分¹³以外、高山寺所蔵本と同文である。したがつて、「孔目章成仏心要後序」のうち、『孔目章』卷一の底本は高山寺に現存する宋版と考えて良いであろう。おそらくは、卷四もかつて高山寺に所蔵されていたものと思われるが、管見の限り、目録等では所在が確認できない。

三 宋版『孔目章』卷四後序よりみた宋代華嚴宗の動向

湛睿写「孔目章成仏心要後序」には、散逸したと思われる高山寺蔵宋版『孔目章』卷四の後序（以下、

卷四後序）も書写されている。この卷四後序にはいくつかの興味深い記述があるが、全文の翻刻については別稿を用意しているため、本稿では要点を述べるに留めたい。

宋代には、各地の寺院で仏典の印刷事業が行われていた。宋代の印刷仏典としては、東禪寺と開元寺で刊行された福州版大藏経や、湖州の思溪藏などが著名だが、高麗から送られた華嚴宗章疏を所蔵していた杭州の慧因教院でも独自に開板事業が行われていた。慧因教院で刊行された華嚴宗章疏は、高山寺に多く所蔵されている。

宋版『孔目章』卷一の後序（以下、卷一後序）には、高麗から請来した『孔目章』を浄源が開板しようとしたが果たせず、浄源が没してから六〇年弱経った紹興一六年（一一四六）に至って、ようやく義和・思彦・道僊によって慧因教院で開板されたことを伝える。高山寺の宋版を調査した常盤氏は、卷一後序に「道僊は……工に命じて斯の文一卷を開刻す」とあることから、道僊が開板したのは『孔目章』卷一のみであり、卷二・四は別人によるものと推測した¹⁴⁾。また、大屋氏は、高山寺蔵宋版『孔目章』卷一・二八丁の版心に「比丘 扱梧重刊」とあることについて、「重刊の文字意義明らかならず」としつつ、宋における高麗大藏経の復刻の意味と捉えているようである。

翻って、「孔目章成仏心要後序」の卷四後序を参照してみると、この後序の著者こそ扱梧¹⁵⁾という人物であることが分かる。称名寺聖教八五函五号・第5紙目表の末尾には以下のようにある。

皆乾道九年季冬月崑山能仁院比丘扱梧寓慧因教院謹題

伝賢首教比丘廿微校勘¹⁷⁾

この刊記によって大屋氏が着目した「重刊」の意味も了解されよう。つまり、高山寺藏宋版『孔目章』は、巻一も含め、紹興一六年に刊行された初版本ではなく、乾道九年（一一七三）の重版本なのである。

卷四後序によれば、扱梧は宗密撰『大方広円覚経略鈔』（以下、『円覚経略鈔』）が乾道六、八年にかけて有志の学僧らによって重刊（復刻）されたことに刺激を受け、「先師祖円証老花嚴」によって巻一のみ刊行されていた『孔目章』の続刊を決意したという。円証とは、華嚴宗章疏を入蔵させた義和を指す。そして「高麗古本」に基づいて残りの三巻を開板し『孔目章』全四巻を重刊した扱梧は、「庶くは略鈔と同じく、永遠に印行せんことを。（庶同略鈔、永遠印行。）」¹⁸⁾と、『孔目章』の末永き流通を祈念している。以上に述べてきた宋版『孔目章』の重刊という事例は、宋代の華嚴教学史の中にどのように位置づけられるだろうか。ここに宋代華嚴宗における智儼の著作の開板状況と関連事項を示せば、次のようになる。¹⁹⁾

元豊八年（一一〇八五）

義天が入宋、浄源に師事する。翌年、高麗に帰国。

紹興一五年（一一四五） 四月

義和によって華嚴宗章疏の入蔵が実現。

同年 七月

秀州華亭県善住教院の衆僧が智儼撰『五十要問答』を開板。²⁰⁾

紹興一六年（一一四六）五月 智儼撰『孔目章』卷一開板。

乾道五年（一一六九）九月 智儼撰『金剛般若經略疏』開板。

乾道六年（一一七〇） 宗密撰『円覚経略鈔』の重刊（復刻）が始まる。

乾道七年（一一七一） 撰者未詳『明宗記』成立。

乾道八年（一一七二） 宗密撰『円覚経略鈔』復刻版が完成。

乾道九年（一一七三）一二月 智儼撰『孔目章』重刊。全四巻が刊行される。

紹興四年（一一九三）一月 撰者未詳『明宗記』開板。

智儼の著作も義天によって中国に復還したが、当時は澄観・宗密の教学が重視されていたこともあって、その開板が始まるのは義和が慧因教院住持となる紹興年間（一一三一―一一六二）まで下る。²¹その後、智儼の思想は可堂師会（一一〇二―一一六六）によって再評価され、師会没後の乾道七年（一一七二）には、中国で初めての『孔目章』巻四・融会一乗義に対する註釈書『釈雲華尊者融会一乗義章明宗記』（以下、『明宗記』）が成立する。²²統藏二一人所収の『明宗記』は冒頭教行を欠くが、この欠落部分は称名寺所蔵の湛睿手沢本によって補うことができる。²³本書の撰者について、称名寺蔵『明宗記』（称名寺聖教六一函四号）には「影に遯れ名を韜みて釈し序記す（遯影韜名釈序記）」とあり、意図的に撰者名を伏せていることが窺える。²⁴吉田「一九九六」および「二〇〇四」によると、『明宗記』は師会の説に影響

を受けつつも批判的な立場をとる。すなわち、師会は『法華経』の会三帰一をもつて華嚴の同教一乘を解釈したが、『明宗記』の著者は『華嚴経』のみで同教を解釈し、華嚴宗の独自性を強調しようとするという。このような『明宗記』の思想は、北宋期には主に天台の学僧によって論じられてきた華嚴教学が、やがて「宗」としての独自性を追求するようになり、セクト化していく過程で生じたと考えられている。

乾道年間の『孔目章』重刊は、『明宗記』成立の二年後に行われた。択悟と『明宗記』の著者の関係は不明であるが、両者に共通する背景として、師会の唱えた復古的な華嚴教学に影響を受け、華嚴宗第二祖としての智儼を顕彰するという一連の流れの中で『孔目章』が注目されたことがあったと言えよう。さらに、巻四後序によつて、『明宗記』成立時にはその註釈対象である「融会一乘義」を含む『孔目章』巻四は未刊行であったことも明らかにされた。巻四後序の中で択悟は『孔目章』重刊を決意した経緯を『円覚経略鈔』の重刊に触発されたと説明しているが、刊行の時期と場所を考慮すれば、『明宗記』の思想的影響があった可能性は高いであろう。択悟が表立つてその名を挙げないのは、あるいは『明宗記』自体が匿名で撰述されたことと関係するのかもしれない。

また、巻四後序によると、択悟が『円覚経略鈔』復刻版を見たのは「円覚院」、すなわち思溪版の開板が行われた湖州の円覚禅院であったという。ただ、『円覚経略鈔』の復刻そのものが円覚禅院で行われたのか、復刻版が所蔵されていただけなのかは判然としない。しかし、いずれにしても、平江府（蘇州）崑山の能仁院の僧であった択悟が、杭州の慧因教院や湖州の円覚禅院とも関わりを持っていたことが窺

える。このことは、宋代の長江デルタ地帯において、「華嚴教学文献センター」²⁶であった慧因教院を中心に、複数の寺院の僧侶らによって華嚴宗章疏の開板が行われていた状況を物語っている。

四 おわりに

小稿では、称名寺および大阪青山歴史文学博物館が所蔵する「孔目章成仏心要後序」に宋版『孔目章』巻四後序が含まれることを明らかにし、宋代における智儼の著作の開板状況を整理した。宋代の華嚴教学が「宗」としての独自性を確立していく中で、次第にその源流である智儼・法蔵の思想が注目を集めるようになり、それと呼応するように著作の開板も進んでいった。南宋における華嚴宗章疏の刊行事業は、主に僧侶の施財によって行われていたことが高山寺所蔵本の刊記から分かっている。²⁷これは、福州版や浙西版などの宋版大蔵経が、募縁活動や富民の援助といった在俗の信者の施財に頼っていたことと対照的である。こうした性格から、宋代における華嚴宗章疏の開板状況は、当時の教学の傾向を強く反映していると言える。本稿で取り上げた乾道年間の『孔目章』重刊についても、宗密撰『円覚経略鈔』復刻版の完成に対抗して行われたものであり、撰者未詳『明宗記』の影響があった可能性が高い。本稿では智儼の著作を取り巻く状況を中心に取り上げたが、今後は前思溪蔵などの浙西版との関係も含め、南宋における華嚴宗章疏刊行の意義を捉えていく必要があると思われる。

参考文献

- 関靖 編「一九三九」『金沢文庫古書目録』巖松堂
- 常盤大定「一九四三」『宋代における華嚴教学興隆の由縁』『支那仏教の研究 第三』春秋社（初出『宗教研究』新一二一六、一三一・二、一九三五～一九三六年）
- 松田福一郎「一九四三」『不空庵常住古鈔旧槧録』大塚巧芸社
- 熊原政男「一九六〇」『入宋の沙門道眼』『金沢文庫研究』五五
- 納富常天「一九七一」『金沢文庫本『華嚴融会一乗義章明宗記』について』『金沢文庫研究』一八四
- 高山寺典籍文書綜合調査団 編「一九七五」『高山寺経蔵典籍文書目録第二（高山寺資料叢書第五冊）』東
京大学出版会
- 高山寺典籍文書綜合調査団 編「一九八一」『高山寺経蔵典籍文書目録第四（高山寺資料叢書第十冊）』東
京大学出版会
- 中條道昭「一九七九」『京都大学図書館蔵明宗記について』『印仏研』通号五五
- 中條道昭「一九八〇」『明宗記』に見る同別二経論』『宗教研究』五三―三
- 吉田剛「一九九六」『明宗記』の著作目的とその同教理解』『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』二一九
- 吉田剛「一九九七」『趙宋華嚴学の展開』『駒沢大学仏教学部論集』二二七
- 大屋徳城「一九九八」『高麗統蔵彫造攷（大屋徳城著作選集第七卷）』国書刊行会（初版一九三七年、便

利堂)

吉田剛「一九九九」「晋水浄源と宋代華嚴」『禅学研究』七七

野沢佳美「一九九九」「宋版大藏経と刻工―附・宋版三大藏経刻工一覽(稿)―」『立正大学文学部論叢』一一〇

竺沙雅章「二〇〇〇」『宋元仏教文化史研究(汲古叢書二五)』汲古書院

吉田剛「二〇〇四」『杭州慧因院(高麗寺)における華嚴学の動向』『仏教学研究』韓国仏教学研究会

遠藤純一郎「二〇〇八」『顕密円通成仏心要集』に於ける顕密観『蓮花寺仏教研究所紀要』一

野沢佳美「二〇一五」『印刷漢文大藏経の歴史 中国・高麗篇(シリーズ・アタラクシア vol.3)』立正大
学情報メディアセンター

京都仏教各宗学校連合会編「二〇二〇」『新編 大藏経 成立と変遷』法蔵館

神奈川県立金沢文庫編「二〇二二」『特別展よみがえる中世のアーカイブズ―いまふたたび出会う古文書たち―』神奈川県立金沢文庫

【注】

(1) 宋代における華嚴宗章疏の復還と刊行については、竺沙「二〇〇〇」六八―七一頁、吉田「二〇〇四」に詳しい。

- (2) 常盤「一九四三」三二九―三三〇頁、参照。
- (3) 関「一九三九」二五八―二五九頁。
- (4) 大正四五・一〇〇六頁。なお、大正蔵所収の『顕密円通成仏心要集』の底本は明末に刊行された万暦版大蔵経(嘉興蔵)である。
- (5) 湛睿筆「顕密円通成仏心要後序」(称名寺聖教八五函五号)に、「渡宋の禅侶、道眼房と名づく有り、一切経を渡し奉るの時、此の心要を感得し、即ち之を伝来す。(有渡宋禅侶、名道眼房、奉渡一切経之時、感得此心要、即伝来之。)」とある。
- (6) 熊原「一九六〇」、参照。
- (7) 神奈川県立金沢文庫編「二〇二二」九―一〇頁(拙稿「大阪青山歴史文学博物館所蔵称名寺文書紙背の湛睿稿本について」、参照)。
- (8) 『顕密円通成仏心要集』の思想内容については遠藤「二〇〇八」、参照。
- (9) 磧砂版『顕密円通成仏心要集』は元代の刊行であるが、湛睿は本書も「宋本」と呼ぶ。称名寺蔵『顕密円通成仏心要集』(称名寺聖教八五函四号)、および関「一九三九」二五八―二五九頁、参照。
- (10) 称名寺蔵『孔目章』巻四(称名寺聖教一〇二函四号)、関「一九三九」二四四頁、参照。同趣旨の注意書きは、称名寺蔵『顕密円通成仏心要』(称名寺聖教八五函四号)にも記されている(関「一九三九」二二五九頁)。

- (11) 神奈川県立金沢文庫 編 「二〇二二」 八八頁 (No. 49 紙背)、参照。
- (12) 常盤 「一九四三」 三二九〜三三〇頁、大屋 「一九九八」 八七〜八八頁 (第六類 続蔵経覆刊本)、参照。
また、高山寺典籍文書綜合調査団編 「一九八一」 二四六頁には、施財者名も含む刊記が翻刻されている。
- (13) 「孔目章成仏心要後序」には訓点や送り仮名の書き入れがある。また、②大阪青山歴史文学博物館蔵「孔目章卷一後序」の冒頭から五行目までは湛睿の書き入れで、この後序が高山寺の宋本にのみあったことや、底本の後序は本文より一行開け、一字下げの体裁であったことなどを記録している。
- (14) 常盤 「一九四三」 三三〇頁、参照。
- (15) 大屋 「一九九八」 八八頁 (第六類 続蔵経覆刊本)、参照。
- (16) なお、南山律宗にも、孤山智円 (九七六〜一〇二二) の『閑居編』にその名が見える扱梧 (生没年未詳) という人物がいる。しかし、南山律宗の扱梧は北宋期の人で、南宋の乾道九年 (一一七三) に『孔目章』卷四後序を記した扱梧とは生存年代が異なるため、両者は別人である。
- (17) 称名寺聖教八五函五号・第5紙目。
- (18) 称名寺聖教八五函五号・第4紙目。
- (19) 本年表の作成に際しては、吉田 「二〇〇四」 二八七〜二九一頁の附表を参考にした。
- (20) 称名寺蔵『五十要問答』(称名寺聖教八函三号)の奥書による。称名寺蔵・湛睿写『五十要問答』は「新渡之本」による校合が朱で書き込まれ、初巻・後巻の巻末に書写された原刊記の中に「紹興乙丑」と

いう年号が確認できるので、「新渡之本」とは宋版であることが分かる。この宋版の由来は明らかでなく、高山寺に宋版『五十要問答』の後巻のみ所蔵されているが、高山寺典籍文書綜合調査団編「一九七五」三〇一〜三〇二頁によると、高山寺の宋版には称名寺蔵本のような刊記が無く、出版地や時期は不明である。ただし、高山寺蔵宋版『五十要問答』後巻の刻工名のうち、「沈二」と「趙宗」は、前思溪蔵の刻工にも同名の人物が存在する（野沢「一九九九」、参照。「沈二」は五二頁六行目、「趙宗」は五三頁七行目）。そのため、高山寺本は前思溪蔵と近い時期に開板されたと考えられ、称名寺本とも年代的には近いと言える。また、宋版『五十要問答』については、常盤「一九四三」（三二九頁）では高山寺には後巻のみ確認でき、初巻は島田蕃根（一八二七〜一九〇七）の旧蔵とされるが、現在は所在不明としている。高山寺旧蔵の宋版『五十要問答』初巻は、その後、松田福一郎氏（一八七五〜一九七二）が所蔵していたようで、松田「一九四三」（図版八九、解題三一頁）に写真が掲載されている。その解題よれば、初巻は寺田望南（一八四九〜一九二九）旧蔵とある。つまり、高山寺旧蔵・宋版『五十要問答』初巻は島田氏の死後、寺田氏の所蔵となった後、松田氏の手に移ったと推測される。

(21) 義和の活動については、吉田「二〇〇四」二七七〜二七八頁、参照。

(22) 吉田「二〇〇四」二八一〜二八三頁、参照。

(23) 納富「一九七一」、参照。

(24) 中條「一九七九」、参照。

(25) このとき扱梧が見た『円覚経略鈔』復刻版の底本は、北宋の康定二年（一〇四一）版あるいは同系統の版本であった可能性が高い。なぜなら、巻四後序には北宋版の序文を踏まえた表現が確認できるためである。続蔵所収の『円覚経略鈔』は永樂十七年（一四一九）開板の明版を底本とするが（続蔵一―一五・二二七丁左上の刊記による）、巻一冒頭には北宋の康定二年（一〇四一）版の原刊記も収録されている。北宋版の思齊（生没年未詳）の序（続蔵一―一五・九〇丁右上）には、「当に聖言水鶴に紛るを懼れ、切に伝者魯魚を駁うを慮る。（当懼聖言紛於水鶴、切慮伝者駁於魯魚。）」とある。そして、扱梧の巻四後序（称名寺聖教八五函五号・第4紙目）にも「伝写魯魚に失し、義理水鶴に紛る。（伝写失於魯魚、義理紛於水鶴。）」という類似の表現が見える。

(26) 竺沙「二〇〇〇」七一頁、参照。

(27) 常盤「一九四三」三三四―三三五頁、参照。

(28) 高山寺所蔵の宋版華嚴宗章疏のうち、刊記の確認できるものを見る限り、全て南宋の紹興年間以降に開板されている。この時期に開板活動が活発になる理由について、従来の研究では、宋代における華嚴教学の進展や、義和が慧因教院住持となったこと等に焦点があてられてきた。筆者もこうした見解に異論はないが、前思溪蔵が完成したこともその要因の一つであった可能性がある。すなわち、円覚禅院における前思溪蔵の開板は遅くとも靖康元年（一一二六）には開始され、紹興二年（一一三二）をさほど過ぎない頃に完成したとされる（野沢「二〇一五」五〇頁）。慧因教院で華嚴宗章疏が盛んに刊行されるようになるのは前思溪蔵の完成後であり、また、高山寺所蔵の華嚴宗章疏の中には前思溪蔵と同じ刻工名が確認でき

るものもある（注（20）参照）。要するに、前思溪蔵の開板という大規模な事業が終了すると、周辺地域の寺院で小規模な開板活動が盛んになっていったと推測できる。